（解説）　陶淵明とその詩

陶淵明は、中国における田園詩の元祖ともいうべき人で、中国を代表する詩人の一人です。

のどかな閑居の詩で知られる陶淵明ですが、そんな彼にとって鬱を払う酒は大事な友であり、のちの李白と並ぶ酒の詩人でもありました。

淵明代表作の一つに「飲酒」詩二十首がありますが、ここに紹介したものはその中でも最も親しまれた、其の五になります。

陶淵明（とうえんめい）

365？～427年。東晋の人。陶潛ともいう。中年にして役人を辞め、故郷に隠棲。東晋が滅んで宋が建国したときも出仕せず、死後「靖節先生」と呼ばれた。その田園詩は後世に多大の影響を与えた。

飲酒　其の五

廬を結んで人境に在り
而も車馬の喧しき無し
君に問う何ぞ能く爾ると
心遠ければ地自ずから偏なり
菊を採る東籬の下
悠然として南山を見る
山気日夕に佳く
飛鳥相い与に還る
此の中に真意有り
弁ぜんと欲して已に言を忘る

（現代語訳）

我が粗末な廬（いおり）は人里にあるそれでいて車馬がうるさく訪れることもない
なぜそうなのかと問われれば
心が俗に遠いのでどこに住もうと辺鄙な場所になってしまうのだ
家の東側の竹垣の下で菊の花を摘む
体を起こしてはるかに南山を眺める
山のたたずまいは夕日に映え
飛ぶ鳥がともにねぐらに帰っていく
この中に人生の本当の姿がある
説明しようにもその言葉を忘れてしまった

酒の詩人としても名高い淵明の「飲酒、二十首」の奏五首です。ただしここには、酒に直接ふれる言葉はありません。「飲酒」の詩題をかりて、どのような生きかたに価値があるかを、穏やかな口調で語っているだけです。

中でも、最も好まれているのが「菊を採る東籬の下　悠然として南山を見る」の二句です。

人里近くに住んでいるにもかかわらず、心のありよう次第で、まるで山奥に暮らす仙人のような境地になれるのだ、そんな達観がうかがえるかのようです。

これらを踏まえたうえで「此の中に真意有り」と語る境地は、かれが十数年におよぶ役人生活をやめて田園に帰り、仕官の束縛とは対照的な「自然――あるがまま」な生活をとりもどしたことに、真に自由で、ここに生きかたの歓びがある、と謳っているように思われます。

参考資料

・細川護熙著　：「中国詩心を旅する」、文藝春秋社
・松浦智久著　：「漢詩　―美の在りか―」、岩波新書

上田勝則

三井金属を退職し、八色石という優美な名をもつ集落に山居暮らしを始めて12年余の歳月が経ちます。求めた土地は地続きの裏山まで含めると3町歩余り。一時社会福祉協議会に勤めましたが、そこも退職してからはこの広大な土地の「里守人」になっています。

廬を結んで人境に在り　而も車馬の喧しき無し
君に問ふ何ぞ能く爾るかと　心遠ければ地自ずから偏なり
菊を采る東籬の下　悠然として南山を見る

生活ぶりは陶淵明の詩境に近いものがあります。

写真の背景にある木々の大半は移り住んで後に裏山から移植したもの。マンサク、ヤマボウシ、マユミ、そしてヤマモミジなどです。

早春のマンサクの黄色い花から晩秋の紅葉まで、四季を通じて楽しめます。

景観維持の草刈りは春から始まり秋まで続きます。夏場には薪作りの作業が追い打ちです。結構多忙な日々を送っているのです。

こんな生活ぶりをホームページにしてみました。

URL:http://satoniwa.webcrow.jp/

「八色石里庭物語」でも検索できます。興味のある方はご一読ください。

上記は平成二六年に作成された、矢上中学の「古稀を祝う同窓会記念誌」に投稿した一文です。

ここにも、「飲酒五」の一部を引用しました。

陶淵明が故郷に戻った心境に、自分の気持ちが重なる気がして載せた次第です。

酒好きなところは陶淵明に負けませんが、思考の深さは程遠い立ち位置です。

しかし、できるだけ近づきたいものと想いつつ、日々暮らしているつもりです。